

子宮がん健診について

子宮に発生するがんは発生する場所で分類すると、子宮の下1/3を占める子宮頸部に発生する子宮頸がん、子宮の上2/3を占める子宮体部に発生する子宮体がんに分けることができます。一般的に子宮がん検診は、子宮頸がんの検査を意味します。子宮体癌がん検診は希望される方や、不正性器出血があったり、エコーで子宮内膜に異常所見がある場合に行います。



子宮がんの起こりやすい年齢と症状と原因について

子宮頸がんにかかる人は20歳代から目立ちはじめ30～40歳代の女性で近年増加傾向にあります。子宮頸がんはヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が原因と考えられており、感染には性交渉が関連していると言われていています。早期の子宮頸がんは自覚症状がないことが多いですが、月経(生理)以外に出血がある、閉経したのに出血があるなどの不正出血がある場合や、月経が不規則などの症状がある場合には検診を受診せず、すぐに医療機関を受診してください。子宮頸がんの原因となるウイルスを早期に発見し、未病の段階で防ぐために、子宮頸がん検診の受診は必要不可欠です。

子宮体がんは40歳ごろから増加して、50歳から60歳代でピークを迎えます。最も多い自覚症状は出血です。不正性器出血月がある場合は注意が必要です。出血の程度には、おりものに血が混ざり、褐色になるだけのものもあります。他には、排尿時の痛みや排尿のしにくさ、性交時の痛み、下腹部の痛みなどの症状があり、腹部の張った感じがあらわれることもあります。

発生には、①エストロゲンという女性ホルモンの刺激が長期間続くことが原因で発生する場合と、②エストロゲンとは関係ない原因で発生場合があります。

①エストロゲンが関係している場合の危険因子には、出産経験がないこと、閉経が遅いこと、肥満、乳がんの治療で使われるタモキシフェンや、更年期障害の治療で使われるエストロゲンを補充する薬を単独で使うことが挙げられます

②エストロゲンとは関係ない原因には、糖尿病、血縁者に大腸がんになった人がいること、遺伝性腫瘍の1つであるリンチ症候群があります。